

被災空間が持つ外部者に対する心理的影響度に関する研究—街歩きを通して—

A study on the psychological impact to the outsider with the affected space—Through the town walk—

田井 夢花

Yumeka Tai

SUMMARY

The present study is the examination of telling earthquake disaster to the next generation. I focus on Kobe where a disaster-stricken area because there are no existing research of telling earthquake disaster at a disaster-stricken area. I distributed the questionnaires to visitors before and after their visits and examined their images of the Kobe earthquake. As a result, there were a lot of new answers after visiting Kobe. These answers were expressed state at the time of the earthquake.

KEYWORDS

Disaster-stricken areas, memory, images of the Kobe earthquake

1 背景・目的

東日本大震災から約 3 年が経過した。被災地ではその記憶を風化させず、経験と教訓を継承するという目的のもと、被災地に残る建造物等を震災遺構として保存しようという議論が行われてきた¹⁾。しかし、被災者の辛い記憶が蘇るという理由等から解体が進められている。このように被災地という場所は震災を伝える場所であると同時に、被災者に震災の記憶を思い出させる場所である。そのため、震災の伝承を行うツールとしては、震災ミュージアムや、語り部による語り等が行われる。そこで被災地という場所に焦点を当て、被災地が震災の伝承ツールとしての効果を持つのかを目的とする。

2 既存研究と本研究の位置づけ

震災伝承に関する既存研究を概観し大別すると、3つの異なるアプローチが見出された。第一のアプローチは震災学習である。船木・矢守・住田(2011)²⁾と山住(2012)³⁾は、震災学習を行う上で学習者が能動的に考え、行動し、学校の外に出て学習することが重要だと述べている。第二のアプローチは震災モニュメントによる伝承方法である。中安・越山・北後・室崎(1990)⁴⁾は、モニュメントがイベントの出来る場と機能を持ち合わせることで人々が集まり、相互に震災について学習していくと述べている。第三のアプローチは災害ミュージアムである。坂本・矢守(2010)⁵⁾と高野・渥美(2006)⁶⁾災害ミュージアムでは訪問者が抱く災害に対するイメージとは別のイメージを抱くことが重要であると述べている。これらの3つのアプローチで共通

する点は、震災伝承において学習者が抱いている震災のイメージと違う印象を様々な伝承ツールから見出せた時に、震災記憶は印象付けられ記憶の継承に繋がるということである。

本研究では、被災地において擬似震災体験をすることでどのような効果が見られるのかを研究する。これは、震災伝承において新たなアプローチであり、伝承効果についても明らかになっていないため、今回の調査を通して明らかにする。

3 研究方法

阪神淡路大震災の被災地である神戸を対象として、語り部による街歩きを題材とした。参加者に対して、街歩き前後に自由記述方式のアンケートを行い、阪神淡路大震災への理解の変化について KJ 法を用いて分析を行った。街歩きのルートは、神戸市庁舎からメリケン波止場までで約 2 時間かけて歩いた。以下の図 1 に赤い丸で示している場所では、当時の建造物が震災モニュメントとして保存されており、立ち止まって話を聞き、震災前の写真と比較等をした。



図 1 街歩きコース 神戸

4 研究結果

自由記述のアンケートを KJ 法により分類した結果，事前と事後で以下のカテゴリーに分類することができた(図 1，図 2)。

まずカテゴリー別に街歩き前後で比較して見ると，街歩き後に「復興についての」カテゴリーと「街歩き後の理解度」に関する 2 つのカテゴリーが新たに追加され，「当時の復旧状況」に関するカテゴリーが消滅した。次に，カテゴリー内の変化を見てみると，事前のアンケートでは「記憶の継承」「人との繋がり」「災害後の取り組み」に関する 3 つのカテゴリーで，回答数が圧倒的に増加していた。特に「災害後の取り組み」に関するカテゴリーでは，回答数が増えただけではなく，記述内容に変化が見られた。事前ではボランティアの制度についての記述が事後ではボランティアの重要性を表現する記述となり，回答数の 9 割を占めていた。一方，「物的被害」のカテゴリーでは回答数の減少が見られた。記述内容としては，事後のアンケートで液状化という新たな記述が増えた。また，事前では建造物や高速道路の倒壊という記述が見られたのに対し，事後では「地盤が上下にずれている所が多い」と街歩きで実際に歩いた場所に関する記述が見られた。同様に，「記憶の継承」に関するカテゴリーで，事後のアンケートに「モニュメントが多くあり語り継がれている」という記述が見られた。

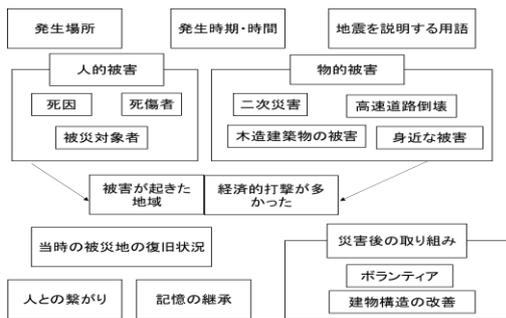


図 2 街歩き前における阪神淡路大震災への理解(全体図)

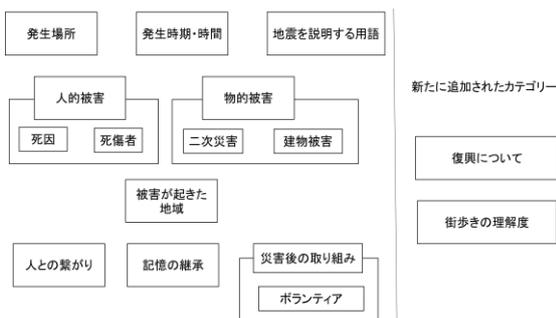


図 3 街歩き後における阪神淡路大震災への理解(全体図)

5 考察

分析の結果から，全体的に事前では阪神淡路大震災について抽象的に書かれていたのに対し，事後ではより具体的になっている。特に新たなカテゴリーとして追加した「人との繋がり」「記憶の継承」「災害後の取り組み」に関するカテゴリーでは，語り部の言葉が大きく影響している。語り部は，図 1 の丸で示した 2 つの地点で，震災当時の人との絆や協力に関する話をしており，被験者が語り部の話を聞いたことで，これまでの震災の印象が変わったことが分かる。また，語り部の内容とは別に，街歩き後に「地盤が上下にずれている所が多い」「液状化」「モニュメントが多くあり語り継がれている」等の新たな記述が増えた。これらの記述は，被災地だった神戸を歩いたことで気付くことのできた記述であり，新たな理解に繋がると推測できる。

以上のことから，元々抱いていた阪神淡路大震災に対するイメージとは別の新しい印象や，より具体的なイメージが街歩きによって生み出されたと推測できる。印象の変化を示す記述のほとんどは，語り部の話が反映していた。しかし，実際に被災地だった場所を訪れ，自分の目で街に残る当時の姿や，震災を伝承するモニュメントを見たことにより，語りとは別の印象を抱いている記述も見られた。これらの新たな印象は震災伝承を通して，学習者が災害に関する固定観念を脱却したことであり既存研究で明らかになっている災害の新たな記憶を想起させる事柄に当てはまる。さらに，街歩きでは，語りでは伝えることの出来ない被災地の姿を自分の目で見ることで，新たな印象を作り出すことができる。つまり，街歩きは震災伝承のツールとして効果的であると言える。

参考文献

- 国土交通省(2012)「震災の教訓として活用できる構造物等調査」http://www.mlit.go.jp/crd/park/joho/dl/fukko/data/shinsai_nokyokun.pdf (参照 I - 3) 2013 年 8 月 12 日アクセス
- 船木伸江・矢守克也・住田功一(2011)「学びのプロセスを重視した防災教育の重要性—阪神淡路大震災[写真調べ学習]プロジェクトを事例として—」災害情報No.9, 137-147
- 山住勝弘(2012)「語りえぬ記憶と復興への学習」教育學研究 79(4), 367-379
- 中安美生・越山健治・北後明彦・室崎益輝(1990)「震災モニュメントにみるメモリアル形成の動機と行為」日本建築学会近畿支部研究報告集。計画系 (39), 165-168
- 坂本真由美・矢守克也(2010)「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察—地震災害のミュージアムを中心に—」自然災害科学 29(2), 179-188
- 高野尚子・渥美公秀(2007)「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察—語り部と聞き手の協同想起に着目して—」国際ボランティア学会，ボランティア学研究 vol. 8, 97-119